

『源氏物語』における女君の容姿考

—女君の「運命」と体形の連関を中心に—

渡邊真希

はじめに

『源氏物語』の女君たちについて、現在にいたるまで多岐にわたる研究がされてきた。特に、衣装や薫物など、外面的な要素から考察した論文は大変多く、それらの役割の重要性は広く認識されている。

だが、外面の最たるものであるはずの容貌や体形といった容姿について、それぞれの女君の人物論の一部として分断されて行われていることが多く、網羅的に論じられることは少なかつた。加えて、容姿に関する美的用語の研究については、神尾暢子¹⁾氏が指摘するように、美的語彙の個別用語の意味や用法を通して考察した論文が多く、個別用語の意味や、用法の整理に終始しがちであり、容姿そのものの作中における役割についての考察はあまりなされていなかったと考える。

しかし、『紫式部日記』において、彰子に仕える同僚の女房たちの容貌や体形を詳細に記していることなどから、紫式部は女性の容姿に並々ならぬ関心を抱いていたことがうかがえる。こうした紫式部の容姿に対する視線は、『源氏物語』中でも活かされており、女君の容貌や体形の造形には、作者の意識や意図が反映されている、非常に重要なものだと考える。

本稿においては、特に『源氏物語』における女君の体形に着目

し、第一節、第二節で男君に「抱かれる」女君と「そびやか」な女君の運命の対比関係、そして、第三節で、対照的な運命をたどる母娘を取り上げ、運命と体格の共通性について考察をする。

第一節 抱かれる女君たち

『源氏物語』において、「抱く」「抱える、抱き上げる」の意²⁾の語は三十三例あり、そのうち、抱かれる客体として、幼児が二〇例、残りの一三例が成人した女君を対象としている。幼児が抱かれるのは当然であるので、本節では、次いで用例が多い女君たちについて論じたい。

抱かれる女君を多い順に並べると、浮舟が八例、夕顔が二例、空蟬が一例、朧月夜が一例、女三宮が一例となっている。また、こうした成人した女君を「抱く」の十三例の内、十一例において、女君が男君によって連れ出される、もしくは、された後に用いられており、非常に特徴的な用いられ方をしている。では、上記の点について、「抱く」がどのように用いられているかを挙げ、男君に「抱かれる」女君たちの共通性について論じていく。

◆浮舟

薫が大君に似た面差しを持つ浮舟を宇治に移そうとして、

人召して、車、妻戸に寄せたまふ。かき抱きてのせたまひつ。
(中略) 君ぞ、いとあさましきにものおぼえて、うつぶし臥

したるを、「石高きわたりは苦しきものを」とて、抱きたまへり。(⑥・東屋・九三〇九四頁。傍線部・括弧内、引用者。以下同。)

匂宮が、対岸の家に浮舟を連れて行く時、

(右近が)「いかでか」なども言ひあへさせたまはず、かき抱きて出でたまひぬ。右近はこの後見にとどまりて、侍従をぞ奉る。

いとはかなげなるものと、明け暮れ見出だす小さき舟に乗りたまひて、さし渡りたまふほど、遙かならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて、つとつきて抱かれたるもいとらうたしと思す。(⑥・浮舟・一五〇頁)

かの岸にさし着きて下りたまふに、人に抱かせたまはむはいと心苦しければ、抱きたまひて、助けられつつ入りたまふを、いと見苦しく、何人をかくもて騒ぎたまふらむと見たてまつる。

(⑥・浮舟・一五一頁)

例の、抱きたまふ。「いみじく思する人はかうはよもあらじよ。見知りたまひたりや」とのたまへば、げにと思ひて、うなづきてゐたる、いとらうたげなり。(⑥・浮舟・一五五〇一五六頁)

◆夕顔

夕顔が物の怪に襲われ突然死した時に、源氏が、

さこそ強がりたまへど、若き御心にて、言ふかひなくなりぬるを見たまふに、やる方なくて、つと抱きて、「あが君、生き出でたまへ、いといみじき目な見せたまひそ」とのたまへど、冷え入りにたれば、けはひもの疎うなりゆく。(①・夕顔・一六七頁)

◆空蟬

方違えて紀伊守邸に来ていた源氏が空蟬の寝所に忍び込み、

いと小さやかなれば、かき抱きて障子のもと出でたまふにぞ、求めつる中将だつ人來あひたる。(①・帚木・一〇〇頁)

◆朧月夜

源氏が弘徽殿の細殿に侵入し、初めて朧月夜と契る時に、

いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。女、恐ろしと思へる気色にて、「あなむくつけ。こは誰そ」とのたまへど、「何かう

とましき」とて、

深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ

とてやをら抱き降ろして、戸は押し立てつ。(①・花宴・三五六頁)

◆女三宮

柏木が女三宮に募る思慕の情を伝えようとして、女三宮の御几帳に忍び寄ると、

宮は、何心もなく大殿籠りにけるを、近く男のけはひのすれば、院のおはすると思したるに、うちかしこまりたる気色見せて、床の下に抱きおろしたてまつるに、物におそはるかとせめて見開けたまへれば、あらぬ人なりけり。(④・若菜下・二二三～二二四頁)

このように「抱く」という語は、女君が男君によって強引に連れ出される、もしくは、された後に使われている他、女君たちの人生、ひいては、物語中の大きな変化の兆候として用いられているのである。

既述のように、浮舟が薫に見出され、宇治に移り住む時や、薫と匂宮の間で苦悩を深め、入水に至る大きなきっかけとなる、匂宮との二日間わたる逢瀬にも使用されている。また、夕顔が廢院で突然死を遂げた時に用いられており、他にも、空蟬と源氏が

(三)空蟬：「いとささやかにて臥したり。」(①・帚木・九九頁)

「いと小さやかなれば、」(①・帚木・一〇〇頁)

「てさぐりの、細く小さきほど、」(①・空蟬・一一七頁)

(四)朧月夜：体格に関する記述なし。

(五)女三宮：「いと御衣がちに、身もなくあえかなり。」(④・若菜上・七三頁)

「御衣の裾がちに、いと細くささやかにて、」(④・若菜上・一四一頁)

「ほそくあえかにうつくしくのみ見えたまふ。」(④・若菜下・一八四頁)

「人よりけに小さくうつくしげにて」(④・若菜下・一九一頁)

「やはやはとのみ見えたまふ御けはひ」(④・若菜下・二二五頁)

以上、男君に抱かれる女君の体形について抜粋したが、傍線部を見ると、身分に関係なく、「ささやか」、「細く」、「あえか」、「小さき」などの語が使われており、これらの女君が小柄であったことがうかがえる。具体的な体格の記載のない朧月夜であっても、若い頃、細身であった源氏が「やをら抱き降ろす」ことができたくらいなので、小柄であったのではないかと推察できる。このように、抱かれる女君の体格の共通性を指摘できると考える。

また、この女君たちには、男君による認識にも共通するところがある。浮舟は、薫にとつて、大君の「形代」に過ぎず、大君の代わりに、手元と呼び寄せ、世話をしようとし、匂宮にとつても、浮舟は、召人の一人として扱うこととが想定される。身分柄もあ

初めて逢った時にも使われ、この逢瀬以降も、源氏が受領階級などの「中の品」の女君に興味を抱き続けるきっかけをつくる。また、源氏と玉鬘の密通が露見し、源氏の須磨流謫の発端になる二人の逢いの場面で用いられる。そして、女三宮が柏木に初めて犯される時にも「抱く」の語が使われているのである。女三宮は、柏木との逢瀬で、不義の子・薫を出産し、出家にいたる契機となっている。

以上のように、これらの「抱く」が使用される場面は、物語においての重要なターニングポイントで使われており、女君においては、自分の人生を大きく変換させる男君に抱かれているのである。

加えて、注目したいのは、抱かれる女君達には体形が共通している点である。それでは、各々の女君の体形について見ていく。

(一)浮舟：「頭つき様体細やかにてなるほどは」(⑤・宿木・四八九頁)

「細やかなる姿つきいとをかしげなり。」(⑥・浮舟・一五二頁)

「いとささやかに、様体をかしく、いまめきたる容貌に、」(⑥・手習・三五二頁)

(二)夕顔：「はなやかならぬ姿いとらうたげにあえやかなる心地して、」(①・夕顔・一五七頁)

「いとささやかにて、疎ましげもなくらうたげなり。」(①・夕顔・一七二頁)

り、どちらの男君でも気軽な相手として見られるのである。夕顔も同様で、頭中将には帚木巻の雨夜の品定めで「痴者」(①・帚木・八一頁)と語られ、「頼もしげなき方」とまとめられる。源氏も、夕顔を気楽な相手と考え、夕顔の元へ身分を明かさず通い、顔さえあまり見られないようにし、自邸に連れ帰ることも考える。空蟬も、左大臣家の輩下の受領の妻であるという身分の心やすさから、あまり抵抗感をもたずに空蟬の寝所に忍び込みこめたことは否めない。加えて、源氏は、逢瀬の後、「すぐれたることはなけれど、めやすくもてつけてもありつる中の品かな」とあくまで、目下の存在として思いを懸けるのである。

また、朧月夜は、右大臣の娘であり、身分も高い。しかし、葵上死後、源氏との結婚の話も出るが、源氏方に断られる。加えて、作中で、重々しいところがないと度々語られ、「かくうしろめたき筋のことさきものに思し知りて、かの御心弱さもすこし軽く思ひなされたまへけり。」(④・若菜下・二六一頁)と「浅はかだ」と源氏から思われるのである。また、女三宮も、朱雀院の手前、丁重に扱っているように取り繕うものの、源氏に「子供っぽい」と何度となく思われる。柏木も、女三宮の寝所に入った時、女三宮の様子を皇女の威厳に満ちているという想像とは異なり、なやなよとした姿、つまり、打ち解けやすさに惹かれ、契る。

以上、論じてきた三人の女君は、身分が高い女君であっても男君からどこか気安い存在として描かれていたことがうかがえる。この「抱く」の語で結びついている女君たちの体形、辿る運命、男君が受ける印象の近似性が指摘できると考える。

第二節「そびやかなる」女君 ― 身分を超える母達 ―

第一節では、男君に抱かれる女君は、小柄であったことや運命の共通性を指摘した。第二節では、小柄を指す「ささやか」、「小さき」などの小柄を意味する語と、対照的な「すらりと長身であるさま」を指す「そびゆ」の語が用いられている女君について考察したい。

『源氏物語』中で「そびやか」が使われているのは、六例あり、五例は女君に、もう一例は幼児の薫に用いられている。本節では「そびやか」の語が大多数使われている女君たちに焦点をあて論じていく。それでは、その女君と体格に関する表現を列挙していく。

明石の君…人さまいとあてにそびえて、心恥づかしきはひぞしたる。(②・明石・二五七―二五八頁)

藤典侍…ただかの人(雲居の雁)の御ほどと見えて、いますこしそびやかに、様体などのことさらび、をかきところはまさりてさへ見ゆ。(③・少女・六一頁)

玉鬘…ほのかなれど、そびやかに臥したまへりつる様体のをかきつるを飽かず思して、げにこのこと御心にしみにけり。(③・螢・二〇一頁)

中の君(光源氏の異母弟・八の宮の娘)…いとそびやかになまめかしう澄みたるさまして、重りかに心深きけはひはまさりた

他、玉鬘は、冷泉帝の次に即位した帝の後見人というべき鬘黒と結婚し、五人の子をもうけ、娘の大君を冷泉院に嫁がせる。また、八の宮の娘・中の君は匂宮と結婚し、長男を出産するのである。

ここで指摘したいのは、『資料一』の表で記したように、「そびやか」な女君が生んだ娘が、例外なく東宮や帝、上皇といった帝位に関係の深い人物と結婚したり、皇子や皇女を生んでいる点である。明石の君が生んだ、明石の姫君(後の明石の中宮)は入内し、寵愛を受け、多くの子女をもうける。藤典侍の娘の六の君は、東宮候補である匂宮に嫁ぐ。また、玉鬘の娘・大君は参院し、冷泉院の第二皇女と第一皇子を出産している。加えて、中の君は、匂宮の第一子を出産しているのである。

もともと、身分も特に高いとはいえない「そびやか」と描写される女君たちの娘が、皇族に嫁いだり、皇族の血を引く子供を産むのは非常に特徴的である。この点についても、小柄な「抱かれる」女君たちが、男君に運命を翻弄される様とは対照的であるといえよう。

第三節 容姿でみる母娘関係 ― 「運命」の対比 ―

第一節、第二節では、女君の運命と体格の共通性について論じたが、第三節では、容姿や体型について作中で言及のある母娘の容姿の対比と辿る運命の関連性について論じたい。なお、直接女君を見る機会の少ない平安時代において、「容姿」は、女君の醸し出す雰囲気や筆跡などにも関係すると考えるため、それも併せて考察する。

まへれど、にほひやかなるけはひはこよなしとぞ人思へる。
(⑤・竹河・七五―七六頁)

いとそびやかに様体をかしげなる人の、髪、桂にすこし足らぬほどならむと見えて、未まで塵のまよひなく、艶々とこちたううつくしげなり。(⑤・権本・二二七頁)

上記で示したように、「そびやか」の語は、それぞれ明石の君、藤典侍、玉鬘が一例ずつ、中の君が二例使用されている。これらの女君に例外なく共通しているのが、自分の階級より上位にいる男君と結婚し、子どもを生んでいるという点である。同じく長身と描かれながらも、「そびやか」の語をつかわれていない軒端の菖は、源氏から軽く見られ、彼の子どもを生むことも、もちろんない。第一節で指摘した、小柄な「抱かれる」女君が、男君にとつて気安い存在として描かれていたのに対し、「そびやかなる」女君は、もともとの身分はそれほど高くななくても、高貴な身分の男君と結婚したり、宮仕えで帝にも重用されたりし、身分よりも重々しい扱いを受ける。どこか気安い存在であった小柄な「抱かれる」女君とは対照的である。

また、彼女たちの生んだ娘が例外なく、帝位と関係の深い人物に嫁いでいることも極めて特徴的である。「そびやか」の語が用いられている女君を見ると、明石の君は、源氏と結婚し、明石の姫君を出産、そして、その明石の姫君は成長すると、入内し中宮となる。また、惟光の娘の藤典侍は、源氏の息子・夕霧の愛人となり、大君、三の君、六の君、二郎君、四郎君を生む。そして、藤典侍腹の六の君は、東宮候補である匂宮の正妻となるのである。

まず、取り上げる母娘だが、夕顔と玉鬘、六条御息所と秋好中宮、中将の君と浮舟の三組について論じてゆく。

○夕顔と玉鬘

夕顔は、源氏に「はなやかならぬ姿いとらうたげにあえかなる心地して、そことりたててすぐれたることもなければ、細やかにたをたとして、ものうち言ひたるけはひあな心苦しと、ただいとらうたく見ゆ。」(①・夕顔・一五七頁)や、頭中将から「いと心細げ」(①・帚木・八一頁)や、「頼もしげなき方」(①・帚木・八四頁)と言われているように、可憐でなよなよとしたタイプで才知にあふれている女君とはいえない難かった。

一方、玉鬘は、華やかな美貌を持ち、利発でしっかりしている女君と造形される。作中、この母娘が対比されて語られることは大変多く、その記述は玉鬘が、夕顔より才気・容姿の面でも優れていると回想される。体格においても、先に指摘したように、夕顔が小柄で弱弱しく華奢な体型だったのに比べ、玉鬘は、背が高く、豊満な体形であった。

夕顔が、研究史において、古くから「内気で薄幸の女性」として描かれている。一方、玉鬘は、鎌倉時代の物語評論『無名草子』に、あまりに自信ありげでしっかり者であり、はかなげな夕顔の娘らしくないと指摘されるものの、「玉鬘の姫君こそ、好ましき人とも聞こえつべけれ」や、「母にも似ずいみじげな娘」と評されている。以上のように、対比されることが多い母娘であるが、たどる運命も同じく対照的である。

母である夕顔は、頭中将の愛人となるが、彼の北の方に脅され、身を隠す。そこで源氏と恋に落ちるものの、逢瀬の際に源氏連れ

て行かれた麿院で急死するのである。一方、玉鬘は、源氏の養女として引き取られ、鬘黒の熱心な求愛を受けて結婚する。鬘黒は若く美しい玉鬘に夢中になり、鬘黒北の方は実家に戻り、この北の方と鬘黒は、実質的に離婚する。この「いとささやか」で、病でやつれた鬘黒北の方は、長身で豊満な体型の玉鬘に妻の座を奪われるのである。この二人も体型などが対照的であるのは非常に興味深い。頭中将の北の方の脅しに屈服してしまふ夕顔とは、実に対照的である。加えて、夕顔が頭中将や源氏の妾であったのに対し、玉鬘は、鬘黒と正式に結婚する。こうした運命の対比も、容姿や体形の対照性と有機的に結びついていると考える。

○六条御息所と秋好中宮

六条御息所は、大臣家に生まれ、東宮に参入し、中宮になることも想定されていた女君だった。そのためか、気位が高く、源氏に「心ゆるびなく恥づかしくて我も人もうちたゆみ、朝夕の睦びをかはさむには、いとつましきところのありしかば、うちとけては見おとさるることや」(④・若菜下・二〇九頁)と会うのを躊躇うくらい女君であったと回想される。なお、六条御息所は、教養も高く、特に筆跡については、作中を通して源氏に絶賛され、強調される。

一方、六条御息所の一人娘である秋好中宮(梅壺の女御、前斎宮の女御。以下、秋好中宮)は、「いとつましげにおほどかにて、ささやかにあえかなるけはひのしたまへれば、いとをかしと思しけり」(②・絵合・三七四頁)と、おっとりとした印象を冷泉帝に抱かせる。冷泉帝と秋好中宮は、源氏と六条御息所の七歳差よりも大きい九歳の年齢差があるが、秋好中宮は寵愛を受ける。

少、短気で気ままなところのある人物として描かれる。一方、浮舟は、あどけなく、おっとりとなよなよした気質として描かれる。

この母娘も運命についても対照的である。中将の君は、八の宮邸に上臈の女房として仕え、八の宮と契り、浮舟を生むものの、中将の君は仏道に発心した八の宮に疎まれ、浮舟の認知すらされなかった。しかし、最終的には、一人の妻を守る、裕福な受領である常陸の介の北の方になる。一方、浮舟は、匂宮と薫という最上の身分の男君に愛されるが、どちらの正妻にはもちろんなり得ない。そして、二人の男君の間で悩んだ浮舟は入水するものの死にきれず、最後には出家する。

中将の君は、自身が語るところによると、夫・常陸の介との関係が対等に語り合える夫婦関係である。それに対し、浮舟は、薫にとつて、第一節でも述べたように、入水して失うまで大君の「形代」であつたし、匂宮には浮舟は召人候補の一人として見られ、身分の差という壁はあれど、対等に語り合う相手ではなかったのである。

結婚という社会的制度の中で、ある程度幸せな日々を送る母・中将の君と、俗世を捨て尼になり、ようやく心の平安を得る娘・浮舟の運命もまた、対照的である。

三組の母娘をとりあげ、体型の対比が、性格、ひいては運命の対照性と共通していると本節では指摘した。興味深いのは、『源氏物語』の本編(桐壺・雲隠)では、体形が対照的と言える母娘の、娘の方が結婚をし、幸せになるという設定であつたが、宇治十帖

源氏の夜離れを嘆く六条御息所とは大きな違いである。

また、体格の面でも、六条御息所・秋好中宮の母娘関係において、対比関係にある。六条御息所の体格や体型については記載がないため、六条御息所と似ているという明石の君の身長が高いこと(③・少女・三十一頁)と世間からも対照的だと言われている母娘の対比は、容姿の対比によつて、より鮮明に浮かび上がるのである。

加えて、筆跡についても、六条御息所は、筆跡において名手だといふことは先に述べたが、秋好中宮は、「宮の御手は、こまかにをかしげなれど、かどや後れたらん」(③・梅枝・四一六頁)と風情はあるが、才気に乏しいと源氏に語られており、筆跡においても母娘である六条御息所と秋好中宮の共通性はみえない。

また、この母娘の性格にも対比関係にある。さきほど指摘したように、気詰りなほど気位の高い六条御息所に比べ、秋好中宮は、おっとりとした情味のある優しさを持つ人物として描かれる。そして、「御幸ひの、かくひきかへすぐれたまへりけるを、世の人驚ききこゆ」(③・少女・三十一頁)と世間からも対照的だと言われている母娘の対比は、容姿の対比によつて、より鮮明に浮かび上がるのである。

○中将の君と浮舟

中将の君と浮舟も、体格がまったく対照的な母娘として描かれる。まず、中将の君は、でっぷりと太った人物として描かれ、浮舟は、小柄でほっそりとした人物として描かれる。性格についても、中将の君が、「心地なくなどはあらぬ人の、なま腹立ちやすく、思ひのままにぞすこしありける」(⑥・東屋・七十八頁)と、多

での中将の君・浮舟をみると、そうは言い難くなつてきていることとである。このことから、宇治十帖の特異性が指摘できよう。

おわりに

本稿では、『源氏物語』中で、容姿、特に体形において同語や類義語が用いられている女君たちの今後の運命や男君からの評価が、共通性をもつて描かれている点と、体形が対比されている母娘が、性格や運命も対比関係になつている点について指摘した。こうした書き分けには、紫式部の女君の人物造形における強い意図を感じさせるものである。

以上から、『源氏物語』において、容姿とは、外面的評価にとどまらない、登場人物たちの内面や運命、ひいては、作者の意図と有機的に結びつく、本質にせまるものだと考察する。

『源氏物語』は、こうした物語の伏線となる女君の緻密な容姿の書き分けがあることにより、登場人物たち一人ひとりの個性が鮮やかに描かれているのである。

【資料一】

「そびやかなる」女君の娘	結婚相手	結婚相手の地位	子ども
明石の姫君（明石の君の娘）	今上帝	帝	勾宮など多数
六の君（藤典侍の娘）	勾宮	有力な東宮候補	x
大君（玉鬘の娘）	冷泉院	上皇	第二皇女、第一皇子

【脚注】

①先ほど例に挙げた衣装と薫物に関しては、吉海直人編『源氏物語研究ガイドブック』（翰林書房、一九九九年九月）によると、衣装が八十編、薫物については四十三編の論文があり、活発に論じられていることがうかがえる。

②容姿とは、「すがた。かたち。顔立ちと体つき。」『広辞苑』（新村出編）『広辞苑』第五版、岩波書店、一九九八年十一月）とあり、本稿でも顔立ちのみならず、体形も含め、「容姿」とよぶ。

③神尾暢子「源氏物語の美意識」『国文学』四〇巻三号、一九九五年二月）

④表記のゆれを防ぐため、表題は、体型・体格どちらも指し示す語として用いている。

⑤女が男によって略奪される、もしくは、された後の十一例の内訳としては、浮舟が六例、夕顔が二例、空蟬が一例、女三宮が一例、臘月夜が一例となっている。なお、浮舟の残り二例は、浮舟が入水した後、横川の僧都に助けられた場面や、妹尼に看病を受けている場面に用いられている。

⑥源氏の体格について、「いたうそびやぎたまへりしが、すこしなりあふほどになりたまひにける御姿など、（後略）」（②・松風・四一六―四一七頁）と若い頃、かなり細身であったことがうかがえる。また、「女にて見たてまつらまほし」（頭中将談、①・帚木・六一頁）や、「女にて見ばや」（兵部卿官【紫の上の父】談、①・紅葉賀・三一八頁）と語られており、『源氏物語』中で、「女性にしてみたい」と言われる対象の五例中二例を源氏が占めているのは特徴的である。その源氏の体つきが、骨格のがつしりした筋肉質であったことは考えにくい。〈立石和弘「女にて見奉らほし」考——光源氏の容姿と両性具有性」『国学院雑誌』九二号、一九九一年）参照。

⑦⑤・宿木・二九【三三】⑥東屋・二〇【三三】

⑧「姫宮にこれを奉りたらば、いみじきものにしたまひてむかし、いとやむごとなき際の人多かれど、かばかりのさましたるは難くやと見たまふ。」

がえる。

⑨●明石の君↓受領階級出身だが、その物腰は、「たをやぎたるけはひ、皇女たちと言はむにも足りぬべし。」（②・松風・四一六頁）と皇女にも引けを取らないと語られ、妾として仕えるのではなく、源氏と結婚する。

●藤典侍↓宮仕えをしており、「おぼえことにて、内裏、東宮よりはじめたてまつりて、六条院などよりも、御とぶらひどもとこそせきまで、御心寄せいとめでたし。」（③・藤裏葉・四四七頁）と、葵祭の使者に選ばれ、天皇や東宮、源氏から祝いの品をもらい、彼らの覚えが良いことがうかがえる。

●玉鬘↓源氏から、「人柄は、宮の御人にていとよかるべし。いまめかしきいとなまめきたるさまして、さすがに賢く、過ちすまじくなどして、あはひはやすからむ。さてまた宮仕にもいとよく足らひたらんかし。容貌よくらうはうじきものの、公事などにもおぼめかしからず、はかばかしくて、上の常願はせたまふ御心には違ふまじ。」（③・藤椅・三三五―三三六頁）と語られ、家庭に入っても、宮仕えに出てたとしても、どちらも不足なくこなす人物として語られる。

●中の君（八の宮の娘）↓中の君は、勾宮との結婚後、薫から思慕の情を訴えかけられるが、「ひたぶるにいぶせくなどはあらで、いとらうらうじく恥づかしげなる気色もそひて、さすがになつかしく言ひこしらへなどして、出だしたまへるほどの心ばへ。」（⑥・宿木・四三二―四三三頁）でたくみに薫を退ける。薫は、その中の君の態度に「いと多くまさりて思ひ出でらる」（同・四三三頁）と思うのである。

⑩ここで興味深いのは、「ただかの人（雲居の雁）の御ほどと見えて、いますこしそびやかに、」（③・少女・六一頁）と、小柄な雲居の雁の生んだ子供より、長身だと書かれる藤典侍の生んだ子の方が、優れていると描かれる点（すべて十二人が中に、かたほなるなく、いとをかしげにとりどりに生ひ出でたまける。内侍腹の君達なん、容貌をかしう、心ばせかどありて、みなすぐれたる。」（④・夕霧・四八九頁）より）である。第二節でも指摘したが、体格と女君の運命が有機的に結びついているという傍証になると考える。

⑪玉鬘に関する記述は多いため、一部抜粋すると、

【容姿】「正身も、あなをかしげとふと見えて、山吹にもてはやしたまへる

⑥・浮舟・百五十五頁）と、勾宮は浮舟を姉の女房にさせることを考える。

⑦①・夕顔・一九

⑧「女の御さまもげにめでたき御盛りなる、重りかなる方はいかがあらむ、をかしうなまめき若びたる心地して、見まほしき御けはひなり。」（②・賢木・一〇五頁）、再びの源氏との逢瀬を一旦は拒絶しながらも、拒みきれず源氏にいざりよる臘月夜に對し、「さればよ、なほけ近きは、とかつ思さる。」と、源氏は思う。（④・若菜上・八〇頁）等。

⑨④・若菜下・二二六

⑩中村幸彦他編『角川古語辞典』第三卷（角川書店、一九八七年）七〇五頁参照。

⑪第二節では、「そびやか」と同根の「そびゆ」も同じ扱いとする。また、表記の揺れを防ぐため、大部分に用いられている「そびやか」を使用する。（中村幸彦他編『角川古語辞典』第三卷（角川書店、一九八七年）七〇五頁参照。）

⑫軒端の萩の体格は、源氏が垣間見て「いと白うをかしげにつぶつぶと肥えてそぞろかなる人の、頭つき額つきものあざやかに、（後略）」（①・空蟬・一二〇頁）や、源氏が空蟬の寝所に忍び込んだものの叶わず、軒端の萩と契る際、「衣を押しやりて寄りたまへるに、ありしけはひ（空蟬と契った夜の感触）よりはものものしくおぼゆれど、（後略）」（①・空蟬・一二五頁）と長身（大柄）に描かれるが、「そびやか」の語は使われていない。

⑬源氏は軒端の萩について、「主強くなるとも、変らずうちとけぬべく見えしさまなるを頼みて、（後略）」（①・夕顔・一四六頁）や、軒端の萩の筆跡を見て「手はあしげなるを紛らはし、さればみて書いたるさま品なし。灯影に見し顔思し出でらる。うちとけで向かひぬたる人は、え疎みはつまじきさまもしたりしかな、何の心ばせありげもなくさうどき誇りたりしよと思し出づるに（後略）」（①・夕顔・一九一頁）と思い、軽んじていることがうか

御容貌など、いとはなやかに、こぞ疊れると見ゆるところなく、隈なくにほひきらきらしく、見まほしきさまぞしたまへる。」(③・初音・一四八頁)。「けざげきとものきよげなるさましてゐたまへり。」(③・野分・二七八頁)【性格】「心はへのかどかどしくけ近くおはする君」(④・若菜下・一五九頁)

※「母君よりもまさりてきよらに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高かうつくしげなり。」(③・玉鬘・九二頁)

・「母君は、ただいと若やかにおほどこかにて、やはやはとぞたをやぎたまへりし、これは気高く、もてなしなど恥づかしげに、よしめきたまへり。」(③・玉鬘・一一七頁)

・「似るとはなけれど、なほ母君のけはひに、いとよくおぼえて、これは才めいたるところぞ添ひたる。」(③・胡蝶・一七五頁)

・「あやしうなつかしき人のありさまにもあるかな、かのいにしへのは、あまりはるけどころなくぞありし。この君は、ものありさまも見知りぬべく、け近き心さま添ひて、うしろめたからずこそ見ゆれ」(源氏談・③・胡蝶・一八三〜一八四頁)

・「いまめかしういとなまめきたるさまして、さすがに賢く、過ちすまじくなどして、(中略)公事などにもおぼめかしからず、はかばかしくて、(後略)」(③・藤袴・三三五〜三三六頁)

とあるように、玉鬘は、夕顔と比べ、容姿や気性についても優れていたと繰り返し指摘されている。

※「いみじうなつかしう、手つきのつぎつぎと肥えたまへる、身なり肌つきのこまやかにうつくしげなるに、」(③・胡蝶・一八六頁)

・「酸漿などいふめるやうにあくらかにて、髪のかかれる隙々うつくしうおぼゆ。」(③・野分・二七九頁)

※筆跡に続き、弔問の文に対する源氏の反応も対照的である。六条御息所は、源氏が葵上を亡くした後、弔問の文を贈るが、源氏はそれをいとわしく思う。(②・葵・一九)一方、紫の上を失った源氏は、秋好中宮の弔問の文に、「言ふかひありをかしからむ方の慰めには、この宮ばかりこそおあしけれ」(④・御法・五一七頁)と思うのである。確かに、六条御息所の生霊が、葵上を取り殺したのであり、いとわしく思うのは源氏にとって当然ともいえるが、紫の上が病床につくきつかけとなつた物の怪は、六条御息所であり、母娘関係にある秋好中宮の弔問の手紙をいとわしく思つても不自然ではないと考える。ところが、源氏が妻を失うという似た場面でありながら、源氏の受け取り方は二極化しているのである。

※「いとおほどこかに女しきものから、(後略)」(③・野分・二七六頁)、「御けはひ、いと若く愛敬づきたるに、(後略)」(③・梅枝・四一三頁)

※「いたく肥え過ぎにたるなむ常陸殿とは見えける。」(⑥・東屋・四十九頁)

※本稿第二節参照。

※「もの恥ぢもおどろおどろしからず、さまよう児めいたるものからかどならず、(後略)」(⑥・東屋・五十頁)。「つつましげに見出だしたるまみなどは、いとよく思ひ出でるれど、おいらかにおほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる。」(同右・九十六頁)

※⑥・東屋・三十六〜三十七頁より。

※注八参照。

※「浮舟は出家後、「とみにせさすべくもなく、みな言ひ知らせたまへることを、うれしくもしつるかなと、これのみぞ生けるしありておぼえたまひける。」と思うのである。(⑥・手習・三三九〜三四〇頁)

※岡部明日香「夕顔―人物に関する評価の歴史」一七二〜一七四頁参照。(西沢正史編『源氏物語作中人物事典』、東京堂出版、二〇〇七年一月)

※斉藤正昭「玉鬘―人物に関する評価の歴史」二〇三〜二〇六頁(同右。)

※大塚ひかり氏『「プス論」で読む源氏物語』、講談社+α文庫、二〇〇〇年一月参照。

※「おほかたの世につけては、惜しうあたらしかりし人の御ありさまぞや、さこそあらぬものなりけれ、よしありし方はなほすぐれて、もののをりごとと思ひ出できこえたまふ。」(②・絵合・三七三頁)と、源氏を言わしめるほどである。しかし、六条御息所の重苦しい人柄のためか、「おほかたの世につけては」(自分との特別の関係をぬきにすれば)と、語られる。

※「中宮の母御息所の、心にも入れず走り書いたまへりし一行ばかりわざとならぬを得て、際ことにおぼえしはや。」(③・梅枝・四一五頁)

・「六条御息所の」御手はなほここの人の中にすぐれたりかしと見たまひつつ、(後略)」(②・葵・三十五頁)

・「言の葉、筆づかひなどは、人よりことになまめかしういたり深う見えた。」(②・須磨・一九三頁)

※「ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとおぼえたり。」(源氏談、②・明石・二五七頁)

※本稿第二節参照。

※「いとつつましげにおほどこかにて、ささやかにあえかなるけはひのしたまへれば、いとをかしと思しけり。」(②・絵合・三七四頁)

「頭つきけはひあてに気高きものから、ひぢぢかに愛敬づきたまへるけはひしるく見えたまへば、(後略)」(②・澤標・三一二頁)

※注二五参照。

【参考文献】

- ・葛綿正一「源氏物語における視線の問題―昼寝をめぐる―」(物語研究会編『物語研究第二集―特集・視線―』、新時代社、一九八八年八月)
- ・木村正中「紫式部の女房批評」(今井卓爾他編『源氏物語講座 第四巻』、勉誠社、一九九二年七月)
- ・永井和子『源氏物語と老い』(笠間書院、一九九五年五月)
- ・橋本ゆかり「抗う浮舟物語―抱かれ、臥すしぐさと身体から―」『源氏研究』第二号、一九九七年四月
- ・友田健次「紫式部による女性美の描写について―紫式部日記と源氏物語―」『四條畷女子短期大学研究論集』第三号、一九九八年十二月
- ・五十嵐正貴「容貌を過剰に気遣う女君―大君について―」『中央大学国文学』第四十二号、一九九九年三月
- ・大塚ひかり『「プス論」で読む源氏物語』(講談社+α文庫、二〇〇〇年一月)
- ・沢田正子「源氏物語の男女の容姿・服装」(増田繁夫ほか編『源氏物語研究集成 第二二巻―源氏物語と王朝文化』、風間書房、二〇〇〇年十月)
- ・大塚ひかり『カラダで感じる源氏物語』(ちくま文庫、二〇〇二年十月)
- ・大塚ひかり『「プス論」(筑摩書房、二〇〇五年七月)
- ・西沢正史編『源氏物語作中人物事典』(東京堂出版、二〇〇七年一月)

※本稿の『源氏物語』の引用は、阿部秋生ほか校注・訳者『新編日本古典文学全集 源氏物語①②③④⑤⑥』(小学館)を使用した。引用文の下括弧は、上部が巻数、中部に巻名、下部に頁数を記した。なお、下部がすみつき括弧(二)の場合は、『新編日本古典文学全集 源氏物語①②③④⑤⑥』の各場面に振り分けられた番号である。